

けいれん・ひきつけ

観察 ポイント

応急処置 ポイント

- 1 「いつから」「どんなけいれんが」「何分間」。
- 2 けいれんが、左半身、右半身だけのような左右差がないか。
- 3 その時の「体温」は何度。



- 1 顔を横向けにして、衣類をゆるめる。
- 2 体を揺すったり、たたいたりしない。
- 3 口の中に指、物を入れない。
(口内を傷つける恐れ)
- 4 おう吐物に注意(窒息の恐れ)。

けいれん・ひきつけ

1 けいれんが止まっても、意識がはっきりしない(目が合わない、お父さん、お母さんがわからないなど)。
2 くちびるの色が紫色で、呼吸が弱い。

1 けいれんが5分以上続く。
2 はじめてのけいれん。
3 生後6ヶ月未満。
4 6歳以上。
5 けいれん時、体温が38.0°C以下であった。
6 けいれんに左右差がある。
7 おう吐、失禁をともなう。
8 頭を打った。
9 何度も、繰り返しけいれんが起こる。

1 すでに診断がついており、今までに何度か起ったことがあるけいれん発作(てんかん)。
2 左右対称のけいれんが数分でおさまりけいれんのあと短時間で意識を回復し、その後いつもと変わらない。
3 けいれんかどうかわからない。



119
救急車を呼ぶ!



一次・二次救急医療機関
を受診してください(2~5ページ)

1つでも
「はい」
がある

1つも
「はい」
がない

時間とともに、具合が悪くなったら救急医療機関を受診してください。

翌日の朝など、かかりつけ医の先生に診てもらってください。(16ページ参照)

けいれん・ひきつけ

観察のポイント

- けいれんとは、運動に関係する神経の働きの異常興奮により、からだ全体やからだの一部がつっぱったり、ピクピクしたり、脱力したりすることです。白目になっていたり、呼びかけても反応がなかつたりします。
- また、高熱が出た時に、けいれんを起こすことがあります。多くは心配のない熱性けいれんで、生後6ヶ月から5歳頃までに起こります。熱性けいれんは、からだ全体で左右対称に起こります。

家庭でできること

- 抱きしめたり、ゆすったり、たたいたり、大声を出したりしないでください。
- 平らなところに静かに寝かせ、呼吸がしやすいように衣服をゆるめてください。
- けいれんの際に吐いてしまうと、口やの団

□ どがふさがり危険です。顔を横に向けてください。

○吐いたもので窒息を起こす危険性があるので、口の中のものや指を入れないでください(けいれんの時に、舌や唇をかむことがあります)が、けいれんの始めだけに起こることで心配はありません。)

○目の位置、手足の状態を見て、余裕があれば、けいれんの持続時間を計ってください(初めての場合は、あわててしまい、何も分からなくて仕方ありません。)

○けいれんが治まったら、必ず体温を測つておきましょう。

○飲み物や飲み薬は与えないでください。



知って安心 Q&A

Q 急に熱が出て体がふるえていますが、意識ははっきりしています。これはけいれんでしょうか?

A 寒気でふるえているだけで、けいれんではありません。暖かくして様子を見てください。後で高熱が出ます。

Q 激しく泣いた後に息がつまったようになり、体がつっぱってしまいました。けいれんでしょうか?

A 泣き入りひきつけです。つっぱるだけではなく、全身の力が抜けることもあります。本当のけいれんではなく、自然に回復するので心配ありません。
なお、鉄欠乏が原因である可能性がありますので医療機関へ相談してください。

Q けいれんの後に眠ってしまいました。このまま様子を見てもよいでしょうか?

A けいれんの時は、脳が異常に活発になつております。けいれんが治まるときが一時的に休んだ状態になります。見かけ上は眠っているようになります。この状態を後睡眠といいます。脳の活動が回復すると目覚めて心配ないことがほとんどですが、1時間以上目覚めそうにない時は、救急外来を受診した方がよいでしょう。

